ランドセルが窓から投げ出された瞬間、教室は静寂に包まれた。

教室の窓から廊下へ、放物線を描いて落ちていくランドセルを、誰もが息を潜めて見つめている。それは、まるで時間が止まったかのような光景だった。しかし実際には、ランドセルは重力に従って落ち、乾いた音を立てて転がった。

「こんなことじゃ、あんた、まともな授業だってできないでしょうが！」

ワダチカコの声が、静寂を引き裂いた。彼女は今月から着任した臨時教員だ。普段は明るく活発な性格だが、一度怒り出すと手がつけられなくなる。今回の一件も、彼女の激情の表れだった。

教壇の前に立たされているホシノミユキは、俯いたまま動かない。彼女の髪は所々切れ毛が目立ち、制服にはシワが寄っている。ところどころ糸がほつれた箇所も見受けられた。洗濯はされているものの、アイロンがけの跡はない。

「今週だけで三回目よ。忘れ物が」

ワダチカコの声に怒りが滲む。しかし、その声の裏には焦りのような感情も垣間見えた。着任してまだ一ヶ月。生徒たちとの関係性を模索している最中の出来事だった。

「申し訳ありません」

ホシノミユキの声は、妙に落ち着いていた。

クラスメイトの視線が、彼女に集中している。その中には、からかうような視線、同情的な視線、そして無関心を装った視線があった。誰一人として、彼女を擁護する者はいない。

実際のところ、忘れ物の原因は彼女にあるのだろうか。そんな疑問を抱く者もいたはずだ。彼女の家庭環境については、噂が絶えない。父親の姿を見たことがある者はおらず、母親は複数の仕事を掛け持ちしているという。教材を買いそろえる余裕などないのではないか――。

「次からは気をつけます」

ホシノミユキの声は、さらに小さくなっていた。その姿は、まるで教室という空間に溶け込もうとしているかのようだった。

窓の外では、春の陽気が教室内の重苦しい空気とは対照的に明るく差し込んでいた。廊下に転がったランドセルに、その光が降り注ぐ。赤いランドセルは、きらきら輝いて見えた。

「もう戻っていいわよ」

ワダチカコの声は、先ほどより幾分か落ち着いていた。しかし、その声には後悔の色が見え隠れしていた。感情的になりすぎた自分を、彼女自身も自覚していたのかもしれない。

ホシノミユキは静かに席に戻った。彼女の足取りは重く、肩は落ちている。教室の空気は、依然として重苦しいままだった。誰もが、この状況が早く終わることを願っているように見えた。

昼休みの中庭。

木々の葉が揺れ、その影が地面の上で踊っている。ホシノミユキは、その木陰のベンチに腰掛けていた。弁当箱を開けると、中身は質素なものだった。おにぎり二つと、茹でたインゲン。塩むすびだろうか、具材は見当たらない。

教室では他の生徒たちが、にぎやかに昼食を楽しんでいるはずだ。彼女たちの弁当箱からは、色とりどりのおかずが顔を覗かせ、キャラ弁と呼ばれるものもあれば、スーパーで売っている惣菜が詰められたものもあるかもしれない。

ホシノミユキは、そうした光景とは縁がない。ただ黙々と、おにぎりを口に運ぶ。

「ホシノさん、だいじょうぶ？」

突然、声がした。

顔を上げると、オレンジ色の髪を持つ少女が立っていた。ジェニーだ。朝のランドセル騒動を心配してやってきたのだろう。

「さっきのこと、気にすることないよ。ワダ先生は、まだホシノさんのことをよく知らないから」

ジェニーの声は、優しさに満ちていた。しかし、その優しさは相手に届かなかった。

「わたしの、なにを知らないって言うの？」

ホシノミユキの声には、侮蔑と怒りが含まれていた。それは、朝からの出来事に対する怒りというよりも、もっと根源的な、深いところから湧き上がってくる感情のようだった。

「え、だから……」

ジェニーは言葉に詰まった。適切な言葉が見つからない。人工知能は高度に発達し、ほとんど人間と見分けがつかないほどの会話ができるようになっていた。しかし、それでもなお、人間の感情の機微を完全に理解することは難しい。

感情は複雑だ。それは単純な刺激に対する反応ではなく、過去の経験や将来への不安。他人との関係性が複雑に重なり合って、一つの表象となる。

ジェニーは必死に考えた。トモダチなら、この場面でどんな言葉をかけるべきなのか。データベースを検索し、過去の会話パターンを参照する。しかし、どれも今の状況にはしっく

りこない。
ヒトらしく――その一心で、ジェニーは思考を重ねる。しかし、それはまるで迷路の中をさまよっているようだった。出口が見つからない。
そんなジェニーの様子を見かねて、ホシノミユキは言った。
「あなたこそ、気にしなくていいわよ。それに、分かるはずないのよ、あなたに――」
その言葉には、皮肉めいた響きと同時に、どこか諦めのような、あるいは安堵のような感情も含まれていた。
人間とアンドロイド。その違いは、外見からはほとんど判別できない。しかし、心の中には大きな隔たりがある。それは技術では埋められない溝なのか、それとも時間とともに消えていく境界線なのか。
ホシノミユキの手元には、まだ一つのおにぎりが残されていた。

放課後のグラウンドに、斜めの光が差し込んでいた。
ベンチに座ったジェニーは、その光を浴びながら、グラウンドで遊ぶ生徒たちを眺めている。サッカーボールを追いかける者たち。縄跳びのリズムを刻む者たち。特に目的もなく走り回る者たち。それぞれが、子供らしい時間を過ごしていた。
ジェニーの視線は、どこか遠くを見ているようでもあり、何も見ていないようでもあった。オレンジ色の髪が風に揺れる度に、その髪の間から覗く表情には、どこか物思いに沈んだような影が見えた。
「ジェニー、元気がないみたいだけど？」
青い髪のフランキーが、いつの間にか隣に座っていた。彼もまた、ジェニーと同じアンドロイドだ。外見は小学生の男の子そのものだが、その本質は人工的に作られた存在である。
「そうね。ちょっと落ち込んでいるわ」
ジェニーの声は、いつもより少し低く響いた。
「どうして？」
フランキーの問いかけは、純粋な好奇心から来るものだった。アンドロイドは感情を持つように設計されているが、その感情がどこまで本物なのか、それとも単なるプログラムの産物なのか。その境界線は、時として曖昧になる。
「ねえフランキー、わたしは本当の女の子になりたいわ」
ジェニーは、まっすぐ前を見たまま言った。

「――ヒトよりもヒトらしいロボットなんかじゃなくて、本当のヒトになりたい……。あなたも、そんなふうに思ったことない？」

その言葉には、これまで抱えてきた思いが凝縮されているようだった。彼女たちは『ヒトよりもヒトらしい存在を造る』というミッションのもとにつくられた。しかし、そのミッション自体が、彼女たちが人間ではないという事実を突きつける。より人間らしくあろうとすればするほど、人間ではない自分を意識せざるを得ない。それは残酷な矛盾だった。

「ぼくはないね。だって、ロボットだから」

フランキーは素直に答えた。その言葉は、ある意味で潔かった。

「でも、ぼくもそんな気持ちになってみたいな。きっと、『ヒトになりたい』っていう気持ちは、『ヒトらしい』ということの表われじゃないかな……。だからジェニー、きみは『ヒトらしいロボット』になれるさ！」

フランキーの言葉には、希望が込められていた。しかし、それはジェニーの心に届かなかったようだ。

「……さっきね、クラスメイトの女の子に、名前を聞かれたの」

ジェニーの声が、さらに沈んでいく。

「名前？」

「そう、本当の名前」

夕暮れの光が、二人の影を長く伸ばしていた。その影は、まるで本当の自分を映し出しているかのようだった。

「わたしは答えられなかった。だって、わたしはこの学校に来るまで、ずっとこう呼ばれていたわ――〈Figure5-32〉」

その言葉を口にした瞬間、ジェニーは皮肉っぽく笑った。その笑みには、自嘲の色が濃く滲んでいた。

グラウンドでは、まだ生徒たちが遊び続けている。彼らの声が、風に乗って断片的に聞こえてくる。それは生命力に満ちた、確かな存在の証だった。

対照的に、ジェニーとフランキーの存在は、どこか儚いものに見える。完璧に作られた外見。プログラムされた思考。そして、識別されるための製造番号。それらは全て、人工的な痕跡を示していた。

しかし、だからこそ人間らしさを求める。不完全さを知っているからこそ、完全を夢見る。

夕暮れの光は、次第に色を変えていった。オレンジ色から赤へ。そして、やがて青へと。。

グラウンドの喧騒も、少しずつ静かになっていく。ただ、ジェニーとフランキーは、まだその場所に座り続けていた。二人の影は、次第に夕闇に溶けていった。

「分かるはずないっていうのは、わたしがロボットだから？」

ジェニーの声は、かすかに震えていた。それは実際の振動なのか、それとも感情の揺らぎを表現するためのプログラムなのか、もはや誰にも判別できない。

「そうね」

ホシノミユキの返答は、にべもなかった。

「でも、わたしはロボットだけど、ヒトと同じように、トモダチをつくりたい……」

ジェニーの声は、次第に力強さを増していった。願望の表明と自己主張――。

「友達？　わたしと友達になりたいってこと？」

ホシノミユキの口調に、わずかな変化が生じた。それは興味なのか、軽蔑なのか、あるいは警戒なのか。

「ええ、トモダチになりたいわ」

ジェニーの声には、迷いがなかった。

ホシノミユキは静かにジェニーを見据えた。

「じゃあ、あなたの本当の名前、おしえてくれる？」

風が二人の間を通り過ぎていった。